

| | |
|--------------------|-----------------------------|
| Title | 宋代茶館研究の現状と課題 |
| Author | 王, 世禎 |
| Citation | 人文研究. 69 卷, p.115-127. |
| Issue Date | 2018-03 |
| ISSN | 0491-3329 |
| Type | Departmental Bulletin Paper |
| Textversion | Publisher |
| Publisher | 大阪市立大学大学院文学研究科 |
| Description | 三上雅子教授退任記念 |

Placed on: Osaka City University Repository

宋代茶館研究の現状と課題

王 世 禎

宋代社会の生活と文化において、重要な役割を果たした茶館について次々と成果が出されている。茶館研究は発展傾向にあるが、まだ不十分なところが残されている。そこで、本稿は宋代茶館研究の成果を整理し、これらの研究成果に基づいて今後の課題をまとめることとした。これまでの研究は宋代茶館の経営内容と社会機能に対して全面的な考察を行ったと言えるが、宋代茶館研究において残されている課題がある。本稿では宋代茶館研究において史料のデータベース化、茶館の分布空間の整理、茶館の地域格差の検討、及び茶館と人（経営者と利用者）の関係性の分析の必要性を挙げ、その課題を解決するための研究の方向性について明らかにする。

キーワード：宋代茶館 分布空間 地域格差 経営者と利用者 社会文化

はじめに

茶の販売に関する伝説は漢代、晋代から存在している。茶に対する利用は四つの段階があった。一つは食用（茶を食べ物として食べる）である。二つは薬用（茶を薬として飲む）である。三つは飲む（茶を飲み物として飲む）。四つは味わう（茶を芸術の対象として味わう）¹⁾。だから、飲茶という段階に至る前に、食用と薬用の段階がある。飲茶という行為が世の中で習俗になるのは魏晉南北朝の時期である。飲茶の歴史は大体四つの時期に分けることができる。第一は漢魏六朝、第二は隋唐、第三は五代宋代、第四は元明清である。各時期の飲茶の順序と方法には各時期の特徴がある²⁾。最初の飲茶の方法はほとんどが煮茶法³⁾であった。漢魏六朝の時代には煮茶法が主流的な飲茶法であった。隋唐の時期には、製茶の技術の進歩により、煮茶法以外に煎茶法⁴⁾と泡茶法⁵⁾が現れた。宋代の飲茶法は隋唐の煎茶法と煮茶法を受け継ぎ、新しい飲茶法が現れた。これが点茶法⁶⁾である。明清時期には、散茶を作る技術は日々に熟達し、散茶は明清時期の主流の茶になった。製茶技術の変化によって明清時期に流行する飲茶法は宋代の点茶法から泡茶法に変わった。全体の流れを見れば、飲茶の手順は次第に簡単になっていった。

茶館の起源を証明できる一番早い史料は唐代封演の『封氏聞見記』である。唐宋の時期、茶館⁷⁾は茶肆、茶坊、茶楼、茶邸などと呼ばれ、明代以降には茶館と呼ばれた。唐代は茶館の形成時期で、宋代は茶館が最も繁栄した時期の一つである。最初、茶館が出現した時、茶館の機能は単純にお茶を販売することであった。唐代には、その機能に基づいて新しい機能が発展

していったが、茶館の主な機能は茶水を販売することであった。宋代には商品経済の発展に伴い、都市人口が増え、全国の流動人口も増加し、飲食業の発展を促した。そして、宋代には飲茶法の改良、製茶技術の進歩及び仏教、とりわけ禅宗の飲茶習慣の影響などが宋代の飲茶風習を広めることとなった。飲茶は人々の日常生活の重要な一部分となると同時に、茶館の発展も促した。当時の人間が娯楽、交流を追求する需求に応じ、茶館は重要な社会機能を担い、飲茶を中心として群衆が活動する総合的な場所となった。そして、宋代の茶館は前代より長足の発展があった。茶館の数量、類型、機能が多くなり、茶館の施設と飾り、経営方式、サービス内容および茶館の社会機能は日々に完備していき、茶館経営の骨組みを形成した。

宋代茶肆についての研究は2000年以降に急速に増加する。その中の一部分の宋代茶肆研究は茶館の発展史の研究と茶文化の研究の中に含まれる。例えば、丁以寿の『中国茶文化』(2011年)、陳文華の『中国茶文化学』(2006年)などのような茶文化を論述する本である。茶館の発展史を論述した成果はさる多い。その中に劉學忠の「中国古代的茶館」(1994年)、劉清榮の『中国茶館的流变与未来走向』(2007年)、劉清榮の「中国茶館形制、功能的演变与前瞻」(2009年)、王春華の「我国茶館機能發展和變遷」(2014年)などの研究は中国茶館の発展を全体的に論述したものである。

茶館の発展史の研究に含まれた研究以外に、茶館研究は、茶肆自体の類型、経営内容、社会機能などの方面に集中して研究が行われ、成果が出された。その他、飲食業、娯楽空間、文学作品中の茶肆の形象などの方面から茶肆及び茶肆の社会上の位置づけについて検討する成果も見られる。ただ、全体から見れば、宋代茶肆の研究は論文数、専門的著作が少なく、表面的な研究が多いというような問題も存在している。そこで、本稿は主に宋代茶肆の研究成果をまとめ、これらの研究成果に基づいて宋代茶肆研究における課題あるいは問題点を述べていく。

一、宋代茶肆の類型、経営内容、社会機能、発展の原因などに関する研究

宋代茶肆の研究は茶肆の基本的な類型、経営内容、社会機能の方面から着手され、多くの成果が出されている。蔣力の「宋代的茶肆」(1994年)、王俊奇の「宋代的茶肆」(1999年)、楊永兵の「試論宋代茶肆的機能」(2004年)などがこの分野の成果であるが、劉清榮の「宋代茶館的論述」(2006年)は、その中で宋代茶肆の類型、経営、社会機能について最も端的にまとめている。

劉清榮の論文では、まず、茶館の盛況について次のように述べる。宋代の茶館は多くの種類に分類される。例えば茶水販売茶館(茶水を売ることを主業とする茶館)、娯楽がある茶館(茶館の中で講談や音楽を行う)、妓女茶館(飲茶の名を借りた妓楼である)、行業茶館(同業の労働者が集まって仕事の情報をもらう場所である)などである。宋代は、茶館の数量と類型が多くなっただけでなく、茶館の分布も広がり、大都市以外の鎮市にも多くの茶館が分布してい

る。酒肆、食店などの飲食業（分茶店、分茶酒肆）も茶水販売を兼ねて経営するのは茶館の流行を体現している。さらに、宋代茶館の経営特色について次のように概括している。数量の多さ、規模の大きさ、分布の広さなどの特徴は茶館の繁栄を示した。これ以外、次のような茶館の多様な経営文化と茶館の豊富な内容を示してくれる。茶館は雇用制度を採用している。茶館の中に茶博士という専門的な技術業種が出現した。茶館は異なる類型に分けられ、これは茶館の発展が一定の専門化に向いて進んだことを示している。消費者の異なる需求によって、異なる類型の茶館が様々なサービスを提供した。茶水の供給は季節によって変わり、茶水の種類も多様である。茶水販売が主な経営内容ではあったが、旅館や浴堂などのほかの経営内容を兼ねて総合的経営を行うものも見られた。音楽、講談、棋類の遊び、賭博などの娯楽活動を導入し、茶館の競争力を増やすことも行われた。ブランドイメージを構築する宣伝が行われた。また、宋代茶の生産量の増加と製茶技術の進歩、皇帝および上層社会による飲茶風潮の領導、宋代都市商業経済の高度の発達などの要素が、宋代茶館を盛行へと導いていった。

この論文は宋代茶館の類型、経営内容、社会機能、盛行の原因についてはほぼ網羅的に論述している。基本的に、他の成果はこの枠組みを越えるものではない。

二、宋代茶肆の多様な側面を手がかりとする研究

劉清栄論文に代表されるように、宋代茶肆の類型、経営内容、社会機能、発展の原因など、基礎的な部分についてはほぼ明らかとなっているが、さらに、飲食業、娯楽空間、文学作品における茶肆の形象など、宋代茶肆の多様な側面に目を向けている一群の研究が存在している。

1、飲食業

宋代の飲食業から宋代茶肆の役割を論じた論文は少なくない。例えば、鐘金雁の「宋代両京飲食業析論」（1998年）は宋代両京の飲食業に対し、高級の酒樓茶肆、中低層にある飲食店及び食糧、野菜、肉、魚など食材を供給する市場と商行というような三つの段階に分けている。この三つの段階が宋代両京の飲食業を構成した。その中で、高級な茶肆と酒樓は社会の飲食風俗を導く存在として捉えている。また、侯彦喜の「宋代飲食文化初探」（2004年）では、宋代の飲食文化を紹介している。文章の中で宋代宮廷の飲食、宋代都市の飲食、文人の飲食と文化、宋代の飲茶と飲酒文化及び節日の飲食などの内容を紹介し、茶肆を都市飲食の重要な場所として捉えている。これ以外に、游彪の「宋代商業民俗論綱—以城市餐飲業為中心的透視」（2005年）、劉芳心の「宋朝京都飲食業経営特色浅論—以酒樓、茶坊為例」（2011年）、劉樹友の「宋代両京飲食服務業發展原因及概況」（2014年）などの論文は飲食業中における茶肆の役割及びその概況について論じている。これらの研究は宋代茶肆が飲食業において重要な位置を占め、

宋代茶肆が飲食機能を有することより人々の社会生活の中で重要な存在であったことを明らかにしている。

2、娯楽空間

娯楽空間と娯楽内容から茶肆に対して分析した論文もある。馬歆歆の「北宋開封娯楽業研究」(2012年)は北宋開封の娯楽業を考察し、開封の娯楽空間を瓦市勾欄のような総合的な娯楽場所、娯楽業を兼ねて経営する酒楼、茶肆などの施設と慶典、節日、廟会のような集市というように三種類に分ける。そして、この三つの種類の娯楽空間に対して詳しく分析を行い、その空間と娯楽内容を論述した。これらの空間の一つとしての茶肆は経営内容が豊富であり、利用者の身分が多様であることを指摘した以外、宋代の茶肆はその娯楽性と実用性を重んじていることを指摘した。

これ以外に、李簡の「宋代城市的演芸場所与文人之参与—従瓦市勾欄、酒楼茶肆談起」(2013年)は社会文化活動が活発化する中、宋代の文人縉紳が瓦市勾欄、茶肆酒楼の娯楽生活の重要な参与者であり、彼らの参与方式、参与内容、参与程度が宋代都市娯楽にもたらす作用について検討した。宋代茶肆、酒楼の中で、彼らは、音楽、演芸、歌唱などの娯楽活動を行い、茶肆、酒楼は都市の中で重要な演出場所となったこと、及び演芸の発展と茶肆との関係性を論述した。また、于天池・李書の「宋代説唱伎芸的演出場所」(2006年)では、宋代演芸はしばしば茶肆、酒楼の中で演じられたこと、さらに演芸の演出場所は主に茶肆酒楼と瓦市勾欄に集中し、茶肆酒楼において演芸が演出されることは宋代において普遍的なことだったと述べている。茶肆酒楼は誰でも入れる空間であることより、茶肆で演出される演芸は都市の中の観衆の好みに従って発展してきたことも述べている。陳凌の「論宋代城市文娛場所興盛的原因及影響」(2008年)の中で茶肆酒楼と瓦市勾欄のような娯楽空間が流行する原因に対して論述し、このような現象は文化娯楽の商品化と世俗文化の繁栄を促したことを指摘した。

これらの研究では、宋代には茶肆は重要な娯楽活動空間であり、その中で行われた娯楽活動は多様であり、茶肆の発展及び茶肆の中で娯楽活動を行う形式は、宋代社会及び文化娯楽活動の発展に影響を与えたことを明らかにしている。

3、音楽

音楽の発展の方面から茶肆の役割あるいは茶肆の中の音楽の形態を述べる研究は少ない。何麗麗の「宋代市井音楽文化的形成与形態」(2006年)は、市井音楽の形成と発展の原因を述べた上で、市井音楽の各形態を考察している。宋代には、音楽の中心は宮廷から民間に移り、多くの宮廷音楽の中には民間の音楽を取り込み、両者が融合して市井音楽の出現を促した。宋代の市井音楽は瓦市で演奏される音楽、酒肆・茶坊で演奏される音楽、節日に演奏される音楽、流動的に演出する音楽を含んでおり、酒肆・茶坊で演奏される音楽を宋代市井音楽の一部と

して捉え、その形態を詳述している。また、李文正の「宋代民間娯楽活動中の音楽表現形式及特徴」(2014年)では、宋代民間娯楽活動の音楽の形態を述べた上で、音楽の形式は商業化、専門化、世俗化の特徴を呈していたことを明らかにしている。このように酒肆・茶坊で演奏される音楽は民間娯楽音楽の重要な一部分をなしていたと理解されている。

4、賭博場

宋代茶肆と賭博場との関係性についても研究が進められている。紀昌蘭の「試論宋代社会的賭場与賭風」(2016年)では、宋代の賭博場はほとんど茶肆、酒樓、妓館を兼ねて経営していたことに言及し、賭博場の経営及び官府の賭博場に対する取り締まりについて考察を行った。論文中では洪皓『松漠紀聞』の「燕京茶肆設雙陸局，或五或六多至十，博者蹴局，如南人茶肆中置棋具也」が引用されているように、茶肆と賭博場との深い関連性に眼が向けられている。

5、浴堂

宋代の浴堂を考察する研究もある。そして、その中で茶肆と浴堂の関連性が示される。劉盈恵の「宋代浴室種類初探」(2015年)は宋代浴室の種類を議論した。論文の中では、宋代の浴室を大きく五つの種類に分けた。一は都市や鎮にある商業性質の浴室、二は家庭中に設置される浴室、三は書院に設置する浴室、四は寺院、道観に設置する宗教浴室、五は官舎や機構に設置する浴室。その中で、茶肆に設置される浴室は商業浴室の一つ種類である。論文の中では洪邁『夷堅志』の「京師浴堂」の例を挙げ、地方から臨安に来た官員が茶肆に休憩する時、殺されて財物を奪われる危機に遭うことを記載している。この中の茶肆は浴堂を設置しており、茶肆と浴堂の関連性を示してくれる。

6、商品経済の発展

商品経済の発展の方面から宋代茶肆の問題を検討する研究は近年に多くなって来ている。李春棠の「從宋代的酒店茶坊看商品經濟的發展」(1984年)では、宋代の商品経済の発展と茶肆の発展との深い関係性を論述し、宋代茶肆、酒店の発展を考察することより、宋代商品経済の発達状況を明らかにした。経済の方面から宋代の社会文化などの内容を考察する研究は2000年以降に増えている。余江寧の「論宋代京城的娯楽活動与城市消費」(2004年)では、娯楽を消費として捉え、宋代の豊富な娯楽活動の参与者を考察している。この論文と同じように娯楽を消費として捉え考察したのが秦開鳳「宋代文化消費研究」(2009年)であり、教育の消費、娯楽の消費、宗教信仰の消費と芸術品の消費に対して詳しく考察し、茶肆で行う娯楽活動の消費が宋代人の日常消費の一種であったことを明らかにしている。このほか、錢慧の「宋代茶坊經營中音樂促銷的形式与特点—對宋代音樂經濟現象的個案解析」(2015年)では、茶肆の中に現れた音楽経済の現象を考察し、茶坊の中で演奏された音楽を宣伝性の音楽とサービス性の音

樂の二つ種類に分けている。この二つの種類の音楽は販売促進のために行われたが、前者は音楽を演奏してあるいは音楽を演奏しながら歌や大声で叫ぶ（商品の内容や情報を伝える歌の一種である）ことによって客人を招来する、後者は音楽の演奏を経営上の特色として客を引き寄せるといった異なる形態があり、音楽経済を構成し、音楽と商品経済が結合していたことを明らかにしている。

7、情報伝播

茶肆自体の機能性の研究の中で、茶肆は情報伝播の役割を果たしていたこと論述したが、唐国鋒の論文「宋代茶坊与商業信息伝播」（2007年）の中では、宋代茶坊と商業情報の伝播の関係性を論じ、宋代茶坊は商業情報が集まり、すばやく伝播する場所であることを明らかにしている。論文の中では孟元老『東京夢華録』巻二「潘楼東街巷」「人情茶坊，本非以點茶湯為正，但將此為由，多下茶錢也。又有一等專是娼妓弟兄打聚處，又有一等專是諸行借工賣伎人會聚行老處，謂之「市頭」と呉自牧『夢梁録』巻十九「凡雇請人力及幹當人，如解庫掌事、貼窗鋪席……或官員士夫等人，欲出路，還鄉，上官，赴任，遊學，亦有出陸行老，顧倩腳夫腳從，承攬在途服役，無有失節」の二つの史料を挙げ、茶肆に行老（「行」の親方）が集まり、労働情報を把握する状況を述べている。これらの行老を媒介として、茶肆は情報伝播の場としての社会的機能を果たしていた。これ以外、相田洋「境界としての茶館」（『橋と異人 境界の中国中世史』（研文選書、2009年）において茶館は一種の通信機関として情報を伝播していたことを指摘した。一例として、南宋、陸游の『老学庵筆記』巻三の中で、秦檜の孫娘の獅子猫が行方不明になったので、その猫の百枚の似顔絵を描いて各地の茶店、茶坊、酒肆に貼らせてその獅子猫を探した話があげられており、この例は茶肆が情報基地の役割を果たしていることを証明してくれる。

8、労働仲介

茶肆自体は、問屋、仲買業を行う牙行が兼業することがしばしば行われたが、行老（「行」の親方）たちが集まる場所でもあった。于志娥・任仲書の「宋代労務市場発展状況研究」（2013年）の中では、都市の中の労務市場と鎮市農村の労務市場について詳しく考察を行っており、都市の中の労務市場は牙人を中心とする労務市場、橋、街、市口において形成される労務市場、人情茶肆（経営内容はお茶を売るだけでなく、主に飲茶の名を借りてお金を取る）中の労務市場、専門的個別サービスを提供する機構⁸⁾、というような四種類の労務市場を挙げ、その特徴や形態について詳しく考察している。

9、文学研究

歴史学以外に、文学の方面から茶肆を研究対象とする成果、あるいは茶肆を背景とする研究

が見られる。岡本不二明の『唐宋の小説と社会』（2003年）の中では、美人局の犯罪を検討している。美人局の犯罪は、組織的犯罪である。被害者の好色を巧みに利用した知能的な犯罪であり、複数の共犯者で行う組織的な計画的な犯罪であると共に、都市型の犯罪である。このような犯罪の出現は、宋代商業の発達、瓦子、茶肆、妓院の発展と密接な関係にあることを明らかにしている。これ以外に、羅陳霞の「宋代小説与民間商貿活動」（2009年）と梅東偉の「宋元小説話本中茶坊酒肆的文学形象与意義」（2016年）は文学作品中の茶肆、酒肆のイメージを議論しており、都市の酒樓と違う村酒店を紹介している。そして、話本の小説の中で、茶肆酒樓はよく物語が展開する空間として使われている。これらの物語は、失意の士子が茶肆で出世した、茶肆酒樓で故人に逢った、茶肆の中で詐欺を行うなどの話を含んでいる。例えば、馮夢龍の小説『喻世明言』巻十一の「趙伯昇茶肆遇仁宗」と『警世通言』巻六の「俞仲举題詩遇上皇」は失意の士子が茶肆で皇帝と出会い、談話によって皇帝の認可をもらい、これをきっかけとして出世したことを描いている。このような文学的な現象が現れる原因は、宋元時代に茶肆酒樓と説唱文学の間に存在する緊密な関連性である。小説話本の中の茶肆、酒樓は三教九流⁹⁾、神怪が集まる場所であるというイメージを示してくれる。

10、社会生活

宋代の社会生活との関連から、宋代茶肆に対して概述しているものとしては、伊永文『宋代市民生活』（1991年）、J. ジェルネ『中国近世の百万都市—モンゴル襲来前夜の杭州』（1990年）などの研究成果がある。しかし、茶の社会生活中の役割あるいは位置付けから考察したのは沈冬梅『茶与宋代社会生活』（2007年）である。この本は宋代の茶芸（茶の製造、飲茶方法、茶具）、茶と宋代の政治生活。茶と宋代社会生活（日常生活、宗教生活、社会における茶に関する観念）、茶と宋代文化（茶書、詩詞、書道絵画）などの方面から宋代生活の中で茶の重用性を論じた。例えば、大臣、将校士兵、僧侶、道士、庶民、四裔に対する賜茶は制度化され、政府慣例の茶礼儀¹⁰⁾が定められた。

この外、茶は日常生活の中で重要な作用を果たした。例えば、茶と生活習俗は以下の内容が含まれる。1、家に客が来ると、茶を以て客を招待する。2、居家飲茶と茶を以て隣人と交際して仲良くする。3、茶と婚俗。婚姻礼儀の中に茶の礼儀を加えた。見合いから婚礼を行うまで、茶は婚姻礼儀の一環として用いられた。4、飲茶の禁忌。周密の『齊東野語』巻十九「且居喪者、拳茶不用托。」（宋人は喪に服す間に、茶を飲む時、茶托を使わない）の習俗があった。5、茶と飲食業。（茶の飲み物、茶を称する飲食業：酒肆、面食店、分茶酒肆）。他には、茶と文人たちの関係性及び宗教生活の関係性について論じている。文人たちは茶を用い、友人との交流のための茶会を行う。しかし、最初の正式な茶会は文人たちが仏学や詩詞を討論、吟ずるために仏教の僧侶たちとの間で行われたものである。茶と仏教の深い関係性は以下の五つの方面に現れる。1、飲茶は寺に生活している僧侶の生活の一部となった。2、茶は仏像を祭る供え

物となった。3、助縁伝道の茶湯会。4、茶は僧侶が文人士大夫と交際する媒介となった。5、茶は寺院経済の重要な構成部分である。

さらに、これ以外に、茶と道教の間には深い関係性が窺える。1、茶を以て神跡を示す。2、聖位を祭る供え物には茶が用いられる。3、神様の誕生日を迎えるために茶を献じる。この本は茶が宋代社会生活の各方面（礼儀、生活、政治生活、文学、宗教）に影響を与えるとともに、密接な関係を有していたことを明らかにしている。さらに、宋代茶館と市民の日常生活の繋がりが日々、密接になることを論述し、異なる類型の茶館の機能、茶館の中での人々の活動、茶館という空間の中で起こった出来事を論じ、茶館の大衆化の傾向を明らかにしている。

また、茶が日常生活の中で交際の媒介となる機能を備えていたことに注意するべきである。たとえば、宋代は茶に関する詩が多く作られている。この中で、文人の間で茶と詩のやり取りをすることを表現する詩が多い。たとえば、蔡襄の「和詩送茶寄孫之翰」蔡正孫『詩林廣記』前集卷八「走筆謝孟諫議寄新茶」などの詩である。晁補之の「張傑以龍茶換蘇帖」¹¹⁾という詩は張傑という人が龍茶（貢茶である龍団）を以て蘇帖（蘇軾の墨跡）を交換することを記載している。これらの記載によって当時の社会における交際の媒介物としての茶の位置付け及び茶文化を窺うことができる。

11、公共空間

近年社会学の公共空間という視角から茶館に対して研究を行う成果が見られるようになってきた¹²⁾。これと異なる視角を持つのが相田洋である。相田洋「境界としての茶館」（『橋と異人 境界の中国中世史』（研文選書、2009年）は「境界」という視点から茶館を位置づけている。「境界」とは、本来のっぺりとした空間や時間にしるしをいれ、内と外とを区切り、メリハリを付ける観念装置である。この「境界」観念は時代によって異なる面もあるが、その表象や両義的性格など、時代を超え文明を超えて共通する面も多い。境界としての茶館は内と外を繋ぐ境界である。朝、人が起きると顔も洗わずに茶館にゆく。茶館に集まって、いろいろなことを話しながら茶を飲む。茶館は一種の通信機関として情報を伝播していた。そこで、茶館は旧中国の都市の住民や田舎の中流以上の人々の日常生活の中で重要な位置を占めた。茶館は境界性の性格がある宿屋、風呂屋などの場所と密接に関係し、共通する性格を持っている。茶館の本質は境界であり、その境界は、どこにも属さないという特性を持つ。それ故に、茶館は「三教九流」万人に開かれた空間、公共領域とされていると述べる。

これらの研究は主に清代民国時期の茶館を研究対象とする研究であるが、徐軻の「宋代茶館研究—以北宋的開封和南宋的臨安為中心」（2009年）では宋代茶肆を公共空間として捉えている。この論文では、茶館の分布に対して詳しく整理すると同時に、宋代茶館の発展過程についても考察している。宋代商品経済の発達、都市人口の膨大、流動人口の増加、娯楽時間の増加、飲茶風俗の盛行、茶業経済の発達が茶館の発展を促し、さらに茶文化の拡大と下層民衆の娯楽

を熱望する需要とが必然的に結びつき、茶館の「公共空間」を作り出したことを論じている。

12、宋代茶肆の分布空間と都市空間

宋代都市空間に対する研究は多くの成果が出されてきた。その中で茶肆の分布空間に触れた研究成果がある。斯波義信は『宋代江南経済史の研究』（1988）の中で、臨安城の空間についてその生態形態によって商業区、官紳区、軍営区などの区域に分け、さらに都市史料を分析して、瓦市、茶肆、酒楼、寺院などの施設の位置の復元図を作り上げた。ただ、復元図は一部分の宋代臨安茶肆の分布にとどまっており、分布空間に対して詳しく分析するまでには至っていない。その分布状況は、官庁、皇族宅院、御園などの施設は主に宮城—崇新門—豊豫門—一線の区域及び御街の西部に分布し、さらに御街北端の東部の区域、余杭門の周辺区域、西湖の北岸の沿岸区域と南岸の沿岸区域などの区域にも分布している。軍営は主に御街北端の東部の区域、外城菜市河の東部区域、西湖の西岸の沿岸区域、外城大運河の西部区域に分布し、呉山と周辺区域にも軍営の分布がある。臨安の娯楽施設は主に朝天門の北部と御街の西部区域に分布される。臨安の経済中枢区は朝天門から韓世忠宅の間の御街に沿う細長い区域である。臨安の娯楽施設の分布空間はこの経済中枢区とほぼ重なる。斯波の研究によれば、茶肆などの娯楽施設は主に官紳区、軍営区、経済中枢区に分布すると述べられる。

高橋弘臣「南宋臨安における空間形態と変遷」（2012年）、「南宋臨安の空間と社会」（2012年）では、主に南宋臨安の空間形態及びその変遷について詳しく論じるとともに、一部分の茶肆の分布についても明らかにしている。これらの研究成果に基づき、発展させる形で、都市空間の中で、茶肆という分布空間の形態を探求し、茶肆の分布空間と都市空間の関連性及び互いに与えた影響を検討する可能性が存在している。

おわりに—宋代茶肆研究における課題

これまで宋代茶肆研究は主に茶肆の経営内容と社会機能に集中して研究されている。その研究視角は茶肆の全体的な経営内容と社会機能を考察するものと、茶肆の個別的な経営内容とその社会機能を手がかりとして宋代社会風俗文化を考察するものがある。これらの研究は宋代茶肆の経営内容と社会機能に対して全面的な考察を行ったと言えるが、宋代茶肆の研究の中でまだ研究されていない課題がある。以下四つの方面に纏め、その課題を述べる。

まず、今までの宋代茶肆研究の中には史料に対する整理と使用の方面に問題が存在している。宋代茶肆研究において主に使われている史料は『東京夢華録』、『夢粱録』、『西湖老人繁勝録』、『都城紀勝』、『武林旧事』などの都市史料と筆記小説史料の二種類に大別される。都市史料には宋代茶肆の経営内容と類型及び社会機能について全面的な記載があり、多くの研究はこれらの都市史料を利用して宋代茶肆に対して研究を行ってきた。一方、筆記小説史料の中に宋代茶

肆の類型と社会機能を補充する記載があり、こちらもよく使われている。宋代茶肆の個別の経営内容と社会機能を手がかりとして宋代社会風俗文化を考察する研究は都市史料を利用する以外、主に筆記小説史料を使う。これらの研究は史料を利用する時、自己に必要な部分を選び取り、一面的に利用するものであり、史料の内容に対する整理が十分ではない。

従って、宋代茶肆を研究するには、まず史料に対して全面的な整理を行うべきである。史料の中で茶肆に関する記載をその場所、登場人物、社会機能、時間などの要素によって整理するデータベースを作る。このデータに基づいて研究を行えば、史料の一面的な使用の問題を免れる、宋代茶肆に対して全面的な分析を行うことができる。

次に、宋代茶肆研究においては、茶肆の分布空間に対する整理と研究が不十分である。宋代の都市空間に関して多く研究成果が得られているが、宋代茶肆の分布空間についてはほとんど研究がなされていない。宋代茶肆の分布空間の問題については、宋代には茶肆が大きな発展を得て、数量が多くなり、都市だけではなく地方に茶肆の数が多くなったというような指摘があるだけであり、茶肆の分布について具体的な考察が行われていない。これらの中で、斯波義信の研究と徐軻の論文の中で少し茶肆分布の問題に言及されているが、ただ首都の開封と臨安の茶肆分布について簡単に述べられるだけであり、全面的な整理を行っていない。

茶肆の分布空間について、都市空間の研究と結合することにより、都市史料、筆記小説、地方志、歳時記などの史料の記載に対する整理と分析に基づいて茶肆分布空間を作り上げることができる。斯波義信と高橋弘臣は南宋臨安の都市空間について詳細な整理と研究を行っている。彼らの研究成果の上に、都市史料、筆記小説などの史料の記載を結合して宋代首都茶肆の分布空間を作り上げることができる。さらに、筆記小説、随筆、地方志などの史料の地方の茶肆の情報に関する記載を整理して分析することにより、地方の茶肆の分布空間と分布特徴を窺うことができる。

もう一つの問題は、宋代茶肆研究の中で茶肆の地域の差異を検討していないことである。都市史料は首都開封と臨安の茶肆の状況を記載している。一方、筆記小説、随筆などの史料は、首都、州、県、鎮などの様々なランクの茶肆状況を記載している。多くの研究はこの二種類の史料を使う時、区別せずに用いている。従って、今後は、史料の差異に留意しつつ、首都—地方、首都—州—県—鎮という段階に眼向け、数量、経営内容、社会機能などに窺える差異を捉えつつ、宋代茶肆全体の状況を考察する必要がある。最後に、宋代茶肆の経営者と利用者に関する問題がある。今までの研究では、茶肆の経営者と利用者はあまり研究されておらず、せいぜい茶肆の利用者身分が多様多様であるという指摘に止まる。経営者と利用者の身分を考察する以外、彼らが茶肆に対する認識及び彼らがどのように茶肆を経営、利用するのかというような問題を考察するべきである。こうすれば、宋代の人はどのように生活の中で茶肆を利用するのか、茶肆の存在は彼らの生活の中でどのような位置があるのか、というような宋代社会風俗文化に関する課題を解明できる。

これ以外に、宋代茶文化の研究成果を結合し、随筆、文集及び茶詩などの史料を利用して宋代の人たちの飲茶に対する態度を解明する上で、茶肆の存在する要因を議論することも必要である。

以上の課題を進める中で、立体的、且つ豊富な宋代茶肆のイメージを導くことが可能となり、さらに宋代茶肆を再認識することによって、宋代社会風俗文化に対する認識を新たにすることが可能となると考えている。

【注】

- 1) 陳文華『中国茶文化学』中国農業出版社 2006年 p. 2
- 2) 丁以寿「中国飲茶法源流考」農業考古 1999年第2期
- 3) 煮茶法は茶と水を鼎や鍋の中に入れて沸騰させ、沸騰した後食具の中に入れて飲むことである。
- 4) 茶葉の貯蔵と茶の味を改善するために、茶を茶餅に作った。茶餅の作り方は茶葉を処理して膏状の物を作り、この茶膏を餅状に作って乾かす方法である。このような茶餅は餅茶、団茶あるいは片茶と称される。煎茶法はこの餅茶を使って茶水を作る飲茶法である。この餅茶を使う時、まずは火でこの餅を砕き、粉状に碾く。この粉状の茶を第一回目に沸騰する水の中に入れて攪拌する。水が第三回目に沸騰する時止め、一番上の黒い水膜をすくい取る。その茶水を後茶碗の中に注いで飲む。
- 5) 泡茶法は茶葉や末茶、餅茶を砕き、瓶や缶の中に入れて後、この瓶の中に沸騰の水を入れて浸す飲茶法である。
- 6) 点茶法は煎茶法と同じ所がある。これは茶葉や餅茶を乾かした後、粉に砕くことを必要することである。その後、茶具を温い水で温めた後、茶を茶具の中に入れ、茶さじで攪拌した後、沸騰の水を注いで茶笕で攪拌する。水面の上一層の白い泡が出たら飲まれる。
- 7) 唐宋の時期、茶館は茶肆、茶坊、茶楼、茶邸などと呼ばれ、明代以降には茶館と呼ばれた。本文章の中で宋代の茶館を茶肆という言葉で表現する。
- 8) 于志娥・任仲書の「宋代勞務市場發展狀況研究」(2013年)では以下のことを指摘した。専門的個別サービスを提供する機構の中で代表的なものは四司六局と凶肆である。四司六局は宴会を開くために専門的なサービス人員を提供し、宴会に必要なものをレンタルサービスを提供する機構である。一般的に官府に設置された機構である。凶肆は葬式のサービスを提供する機構である。葬式を行う時、必要な用具と人員をレンタルする。
- 9) 三教は仏教、道教、儒教を指す。九流は儒家、道家、墨家、法家、名家、雑家、農家、縦横家、陰陽家を指す。また、九流は様々な職業の人を指す。
- 10) 1、祭りの茶礼儀。(先祖を祀る、先帝後を祀る。葬式。) 2、慣例の茶礼儀。(天子誕生日、朝献景靈宮、宮觀寺院を巡る、巡幸、閱兵、翰林学士に茶を賜る、太学国子監を視察する、宴会前に大臣に茶を賜る、諸王納妃、出使大臣や地方から戻った官員は皇帝に会う時、外国の使者と会見する時茶を賜る。) 3、賞賜茶儀。(学士は国史を写すことより茶を賜る、書を献じる時茶を賜る。) 4、政府茶礼。(都堂点茶—政府日常の公務活動の中に茶飲を賜る。省試の時、茶湯を備える。)
- 11) 宋 晁補之『鷄肋集』卷第二十「張傑以龍茶換蘇帖」「寄茶換字眞佳尚，此事人間信亦稀。它日封厨失雙牘，應隨癡顧畫俱飛。」
- 12) 李曉南「從城市公共空間的角度看今昔茶館文化的變遷」(2004年)、王笛『茶館、成都の公共生活和微觀世界 1900-1950』(2008年)等参照。

【参考文献】

- 日本語文献
 斯波義信 1988『宋代江南經濟史の研究』東京大学東洋文化研究所
 相田洋 2009『橋と異人一境界の中国中世史』研文出版社
 岡本不二明 2003『唐宋の小説と社会』汲古書院

- 高橋弘臣 2012 「南宋臨安における空間形態と変遷」愛媛大学法文部論集 33 pp. 1-40
外国語文献
- 陳文華 2006 『中国茶文化』中国農業出版社
- 丁以寿 2011 『中国茶文化』安徽教育出版社
- 劉清榮 2007 『中国茶館の流変与未来走向』中国農業出版社
- J. ジェルネ 1990 『中国近世の百万都市—モンゴル襲来前夜の杭州』（訳本）平凡社
- 伊永文 1991 『宋代市民生活』中国社会出版社
- 沈冬梅 2007 『茶与宋代社会生活』中国社会科学出版社
- 丁以寿 1999 「中国飲茶法源流考」『農業考古』1999年第2期 pp. 120-125
- 劉学忠 1994 「中国古代的茶館」『社会科学戦線』1994年第5期 pp. 120-124
- 劉清榮 2009 「中国茶館形制、功能的演变与前瞻」『農業考古』2009年第6期 pp. 193-200
- 王春華 2014 「我国茶館機能發展和變遷」『貴州茶葉』2014年第3期 pp. 52-53
- 蔣力 1994 「宋代的茶肆」『茶酒漫話』1994年 pp. 50-51
- 王俊奇 1999 「宋代的茶肆」『文史雜誌』1999年第3期 pp. 78-79
- 楊永兵 2004 「試論宋代茶肆的機能」『農業考古』2004年第2期 pp. 181-184
- 劉清榮 2006 「宋代茶館的論述」『中州學刊』2006年第3期 pp. 189-192
- 鐘金雁 1998 「宋代兩京飲食業析論」『雲南教育學院學報』1998年第14卷第4期 pp. 35-40
- 侯彦喜 2004 「宋代飲食文化初探」『開封大學學報』2004年第18卷第1期 pp. 13-19
- 游彪 2005 「宋代商業民俗論綱—以城市餐飲業為中心的透視」『北京師範大學學報』（社會科學版）2005年第1期 pp. 94-102
- 劉芳心 2011 「宋朝京都飲食業經營特色淺論—以酒樓、茶坊為例」『開封教育學院學報』2011年第31卷第2期 pp. 8-10
- 劉樹友 2012 「宋代兩京飲食服務業發展原因及概況」『渭南師範學院學報』2012年第27卷第3期 pp. 120-124
- 馬歆歆 2012 「北宋開封娛樂業研究」華東師範大學碩士論文
- 李簡 2013 「宋代城市的演藝場所与文人之参与—從瓦市勾欄、酒樓茶肆談起」『長江學術』2013年第4期 pp. 49-51
- 于天池・李書 2006 「宋代說唱伎藝的演出場所」『文藝研究』2006年第2期 pp. 87-93
- 陳凌 2008 「論宋代城市文娛場所興盛的原因及影響」『內蒙古農業大學學報』（社會科學版）2008年第4期
- 何麗麗 2006 「宋代市井音樂文化的形成与形態」『福建師範大學學報』（哲學社會科學版）2006年第1期 pp. 33-37
- 李文正 2014 「宋代民間娛樂活動中的音樂表現形式及特徵」『中州學刊』2014年第11期 pp. 135-137
- 紀昌蘭 2016 「試論宋代社會的賭場与賭風」『首都師範大學學報』2016年第2期 pp. 19-26
- 劉盈惠 2015 「宋代浴室種類初探」『鄭州師範教育』2015年第4卷第4期 pp. 81-86
- 李春棠 1984 「從宋代的酒店茶坊看商品經濟的發展」『湖南師院學報』（哲學社會科學版）1984年第3期 pp. 100-107
- 余江寧 2004 「論宋代京城娛樂活動与城市消費」『安徽教育學院學報』2004年第22卷第2期 pp. 29-32
- 秦開鳳 2009 「宋代文化消費研究」陝西師範大學博士論文
- 錢慧 2015 「宋代茶坊經營中音樂促銷的形式与特点—對宋代音樂經濟現象的個案解析」『西安音樂學院學報』2015年第34卷第3期
- 唐國鋒 2007 「宋代茶坊与商業信息傳播」『農業考古』2007年第5期 pp. 141-144
- 于志娥・任仲書 2013 「宋代勞務市場發展狀況研究」『哈爾濱學院學報』2013年第34卷第4期 pp. 93-98
- 羅陳霞 2009 「宋代小說与民間商賈活動」南開大學博士論文
- 梅東偉 2016 「宋元小說話本中茶坊酒肆的文学形象与意義」『中原文化研究』2016年第4期 pp. 123-127
- 徐軻 2009 「宋代茶館研究—以北宋的開封和南宋的臨安為中心」河南大學碩士論文

【2017年8月31日受付，11月10日受理】

The current state and issue of the research achievements about the teahouse in Song Dynasty

WANG Shizhen

Currently, researchers have made many achievements about the teahouse which played an important role in the life and culture in the Song society. Although the research of teahouse has made great progress, there are still many deficiencies, so this paper firstly summarizes achievements of teahouses in Song Dynasty and points out the problems and subjects. The researches so far have carried out the comprehensive inspection to the content and the social functions of the Song Dynasty teahouses' management, but, some subjects have not been studied yet. So, this paper summarized four problems in the researches of the teahouses in Song Dynasty. Firstly, there are some problems in the collections and applications of historical data. Secondly, the collations and researches of the teahouses' distributing space are inadequate. Thirdly, the regional differences of teahouses were ignored. The last but not the least, the factor of human (managers and users) was ignored as well. This paper discusses the feasibility and possibility of solving these four problems based on the discovery and collation of these four issues.

Key words: teahouses in Song Dynasty, distributing space, regional differences, managers and users, social culture